

約30か国の出身者が住む始良市



隔月(偶数月)連載

# 多国籍・多文化の力を 始良市の魅力へつなぐ——。

## パイオニアイラ PIONEIRA

#04

「スクールバスの前方にいつも一人で座っている黒髪の女子生徒がいて、彼女の隣に座って声を掛けたのがすべてのはじまり」と高校時代を振り返るユハスさん。その生徒は親がハンガリーの日系企業に勤務している日本人であった。ハンガリー語も堪能で、出会ったときはシャイだったが徐々に慣れ、親しくなるとユハスさんは彼女から日本のことや日本語を教わった。気付くと日本文化に興味を持ち、日本語を独学で学び始めた。

大学卒業後に来日し、東京の商社を経て、JETRO(ジェトロ)日本貿易振興機構)本部初の海外出身者として就職。海外企業の誘致業務を担当した。「学ぶのが好き」とバイタリティーあふれるユハスさんは仕事をしながら掛け持ちで日本の大

学に入学し、経済学と心理学を履修。その後、以前から関心をもっていた諸外国の現状を報道するジャーナリストをめざした。

日本外国特派員協会が主催するコソボ「The Swadesh DeRoy Scholarship」(スワデッシュ・デロイ奨学金)に挑戦し、2020年の日本について執筆した記事が選考審査員に評価され、初参加で最高賞となる優秀賞を獲得。この受賞を機に、ジャーナリストの道を歩みだした。

現在、取材範囲は高齢化社会の実情のほか、日本の政治・経済・文化など多岐にわたる。また、格闘技全般も記事にし、母国の各種メディアへ情報を提供している。「ハンガリーは格闘技が好きなお国柄」と自身も格闘技ファンだと声を弾ませる。

「来日前までは自己主張が強く、自分のことだけを考えていましたが、日本に来て地域とのつながりや相手に寄り添う姿勢を学んだ」と日本の国民性に感銘を受けているという。結婚を機に2年前に東京から拠点を始良市に移し、ジャーナリスト業とあわせ、テレビ番組のリポーターも務めるなど活躍の場を広げている。「今年、日本とハンガリーは外交樹立150周年。両国の懸け橋になれば」と現在、日本とハンガリーを本でつなぐ「本ノコテ」プロジェクトを進めている。鹿児島で古本を集め、日本語の書籍が不足している母国に無償で配布する構想だ。

「本を通じてお互いの故郷を知り合えるきっかけをつくりたい」と両国の交流拡大に期待を膨らませる。



国際フリーランスジャーナリスト  
ユハス・サンディー  
ハンガリー出身  
Juhasz Sandy

首都・ブダペスト生まれ。9歳からドイツ語、12歳から英語を学び、4か国語を操る。「さまざまな考え方を共有できるのが楽しい」と幼いころから無類の読書好き。以前在住していた東京都大田区の国際都市おおた大使も務める。第9回国民的美魔女コンテストのファイナリスト。宮島町在住。37歳



ヨーロッパのほぼ中央部。ハンガリーの人口は約980万人。自らを「マジャール人」と呼び、祖先の騎馬民族はかつてアジアから良質の牧草地を求めヨーロッパへ数百年かけ移動し定住。ハンガリー人の中には蒙古斑をもつ胎児も誕生する。日本と同じく名前は姓が先にくる。スズキ(自動車)は国民車と言われるほど日本車が普及。言語はハンガリー語、通貨はフォリント。



ハンガリーも温泉王国、ハンガリーの「食べる国宝」といわれるマンガリツァ豚は黒豚みたい、そして桜島に見えるバタチヨニ丘。鹿児島に来て似たものを発見してビックリ。

自国の人に  
紹介したい  
鹿児島・始良の  
モノ・人・場所。



マンガリツァ豚と黒豚



バタチヨニ丘と桜島



ハンガリーも鹿児島でもいすれも温泉地